

# 「漱石の統計科学」

筑波大学大学院ビジネス科学研究科

経営システム科学専攻教授 椿 広 計

19世紀末の倫敦は統計科学勃興の中心であった。「統計科学の目的は、大規模な関連する事実の集合情報を、議論に適した簡潔な表現に集約する方法を発見すること。Galton (1883)」に共鳴したKarl Pearsonは、1891年2月から1893年11月まで38回の公開講義を行った。最初の8回は、1892年に発行された「科学の文法」の基となった。Pearsonは、あらゆる領域が科学の対象足りえることを主張し、その方法論として統計的方法を構想した。1891年11月の講義では、「ヒストグラム」が導入され、1893年1月の講義では、ばらつきの尺度、「標準偏差」が導入された。これらの用語が初めて使われた瞬間である。

世紀末の倫敦に漱石が来た。帰国後、「文学論の序の腹案と草稿（1906年10月頃）」に、「諸家の同説喜と忌々敷事、Crozier, Pearson」という記述を残した。これが、まさにKarl Pearsonなのである。漱石の転機は、池田菊苗（味の素の発明者）との交際が始まる1901年5月が端緒であり、彼は池田を通じて科学への憧れを感じた。8月30日、帰国の途につく池田を送り、9月12日寺田寅彦宛に「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候…僕も何か科学をやりたくなった」と書くに至る。漱石蔵書には、進化論・心理学などの科学文献が多く、その中に「科学の文法」第2版が含まれている。漱石が、この本を購入したのは1901年9月18日であり、上記、寺田宛書簡の直後なのである。

「科学の文法」への漱石の書き込みを追うと、徐々に反感が共感に変ってゆくことが観察される。特に、1章13節「科学と美的判断」への反応は、漱石独自の「文学」創生の決意、"Your reasoning is not quite bad but not well driven at. I hope I shall be able to state the relation between science and literature with more lucidity in my work". である。「文学論の序」にも、留学残り期間1年あまりの時点で「余はここにおいて根本的に文学とはいかなるものぞといえる問題を解釈せんと決心したり」と述べている。進んで、2章11節「外的世界」に対して、"Nothing can be more true than this argument on the external universe. I have been fostering in me just the same opinion for these months"と「自分の考えていたことと同じだ」という記述がなされる。漱石は、本書購入4日後、9月22日に妻へ「近頃は、文学書は嫌になり候。科学上の書物を読み候。当地にて材料を集め帰朝後一巻の著書を致す積もりなれど、おれの事だからあてにはならない。只今本を読んでいると、切角自分の考えた事がみんな書いてあった。忌々しい。」との手紙を送っている。書物購入時期・手紙の時期・漱石の書き込み・「文学論の序」自筆腹案にある「忌々敷」ということが、全てPearsonからの啓示の重要性を示唆している。10月上旬には日記の記述もめっきり減ってしまう。英文学個人教授も断り、全てをかけた科学的文学論研究は、傍目には神経衰弱と見えてゆく。

当時の大学ノートへの記述には「科学の文法」の要点を書きとめたものが多い。「Dataを云えば悉く

sense impressionなり。Observation又はexperimentにて得たるimpressionをanalyseし, abstractし, 又これをsynthesiseし, generaliseし, classifyしてlawとなす。是scienceなり。(中略) scienceにて, classifyし, generaliseしてlawをdeduceするは, practical convenienceあればなり。practical convenienceありとは, 過去を以って未来を推すことを得るなり。Formulaを経験以外のformulaにapplyして手数を省くを得ればなり。(中略) 次にscienceは合理的のimaginationを許す。是hypothesisなり。(中略) 古来の発明家は皆imaginationによりて, suggestionを得, 然る後に此れをverifyせり。Verifyし難しと雖も, probability多ければ此hypothetical lawは, 其probabilityの程度にproportionallyにvaluableなり(後略)」。夏目発狂と尊された留学時代後半であるが, 「この一念を起こしてより6, 7ヶ月の間は余の生涯のうちにおいてもっとも鋭意にもっとも誠実に研究を持続せる時機なり(文学論序)」とも書き残しているのである。

帰国後1903年に東京帝大英文科で行った講義が, 「凡そ文学的内容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し, fはこれに附着する情緒を意味す。(文学論)」の如くモデルや図表を駆使し, 実際にどのような文章がFでどのようなものがfであるかを分解した操作は, 「因子モデル」やテキストマイニングの観点から頗る興味深い。漱石の記述統計科学觀が端的に表れたのは, 留学時代研究に基づく講義の一節である。「その道の人は科学をこう解釈する。科学はいかにしてということすなわちHowということを研究するもので, なにゆえということすなわちWhyということの質問には応じかねるというのである。(中略) このいかにしてすなわちHowということを解釈すると, 俗にいう原因結果という答えが出てくる。(中略) この原因結果とはある現象の前には必ずある現象があり, またある現象の後には必ずある現象が従うという意味で, 甲が乙をしかならしめたなどという意味ではないのは無論である。それでこの原因結果を探るには分解をする。一つの現象をとって『いかにして』ということを究めるには, それが複雑な現象であればあるほど『いかにして』ということを知りにくい。知ったと思うても分解を経た上でないと常に間違う。だから人間はその場合とその時代に応じてでき得るかぎりの分解を企てる。分解をしてある微細なことについて『いかにして』ということが分かると, つぎにはこの零細なる事実をたくさん集めて比較してみる。そこで総合ということが始まる。総合とは同じような事実をたくさん集めて『いかにして』という点においてみな一致していることを見ることである。で総合ができれば, これから一つの法則ができるわけである。それから総合をしてみて『いかにして』という点においていろいろな場合が一致しなければ分類ということができる。まざっとこんなふうで科学はできる(文学評論)」。講義は帝大生の支持を受けず, 試験成績も惨憺なものであり, ほどなく漱石は, 「余にとっては, これほどの仕事を成就したるだけで満足なり。読者にはそこばくの同情あらん。(文学論序)」と述べ, 未完の「文学論」を刊行し, それを実践する人となった。「余は余の提起せる問題が頗る大にして且つ新しきが故に, 何人も一二年の間に解釈し得べき性質のものにあらざるを信じたる(文学論序)」と自負した漱石「文学」こそ日本初の統計科学である。